**１２月２日**　　**テーマ：すべてのことを働かせて益に**

**聖書箇所：ローマ人への手紙　８章２８節**

◆今日のみことば

> 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神が
> すべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。
>
> ローマ人への手紙８章28節

◆メッセージ

あなたが通っている教会が所属する、日本同盟基督教団が、日本宣教を始めた最初のお話をしましょう。

教団創設者のフレデリック・フランソンは、まだ福音が充分伝わっていない日本へ宣教師を送ろうと、１５人の青年をアメリカから送り出しました。１８９１年（明治２４年）のことです。ところが、この宣教師たちに大きな試練がありました。

宣教師たちが来日(日本に来ること)してから、僅か３か月後、一人の宣教師が天然痘にかかって亡くなってしまいました。この人はメリー・エングストンという独身女性、なんとまだ１９歳の若さでした。本当に無念(残念でならないこと)だったでしょう。「あの異教(イエスさまのことを知らない)の国、日本に福音を届けよう、あの人たちも救われなければならないから。」エングストンは日本宣教に燃えてはるばる海を越えて来たのに、まだ日本語を学んでいる最中に病に倒れ、天国に帰ったのです。

神さまのご計画とはいったい何なのでしょうか。彼女は日本に来なければ、天然痘にかかる事もなかったでしょう。１９歳で死ぬ事もなかったでしょう。将来結婚して幸せな家庭を作る事もできたでしょう。伝道の最中に倒れたのなら彼女も少しは満足だったことでしょう。しかしまだ日本で福音を語り出す前に病で亡くなったのです。悔しかったでしょう。アメリカには祈りをもって彼女を送り出した親、兄弟がいます。遠い国の宣教のために彼女を手放した家庭の悲しみは計り知れません。

しかし、彼女の死は無駄ではありませんでした。残された１４名の宣教師は彼女の死によって大いに奮い立たされたのです。葬儀の二日後にエングストンの記念会が行われましたが、この記念会は残された宣教師の派遣式となったのです。この日を境に１４名は日本全国に散り宣教がスタートしたのです。

エングストンの死はまさに一粒の麦の死でした。この一粒の麦を通して、教団が生み出され、私たちが通う教会も支えられるようになったのです。目の前の苦しいできごとだけで、がっかりしたり、あきらめたり、神さまを疑わないようにしましょう。神さまは、すべてを働かせてよきことをしてくださいます。

◆お祈り

「神さま、私たちは涙が流れるような悲しい経験をします。けれども神さまは、それを用いて新しいことをする力をお持ちです。そのことを信じ、涙を拭いて、もう一度立ち上がっていけますように。」

（中野教会牧師　河村 冴）